

# 読売歌壇

## 小池 光選

医師からの結果待つ間のドキドキにああとめどなく身の固くなる 神戸市 西 和代

【評】これは誰でも経験している。お医者と言葉ほど重たいものはない。何と言われるか、天国と地獄の差がある。ドキドキドキ、頼む、大丈夫だと告げて下され。

からっ風の前橋に立つ冬日和朔太郎にはぞっこんだから 伊賀市 福沢 義男

【評】根っからの萩原朔太郎ファンの作者。上州前橋まで足を延ばして、詩人のふるさとを訪ねる。「ぞっこんだから」という率直なる口語表現が正直で、たのしい。

淋しいか淋しくないかと問いかける鍋のおでんの最後のちくわ 守口市 小杉なんざん

【評】一人で居酒屋でも飲んでるのだから。おでんのちくわが一本残る。まるで俺のように淋しいちくわよ。泣けてくるなあ。

熱々のスープをゆっくり飲むように千の一日を手を止めて聞く 名古屋市 山本 望

堤ゆく夫も人影もたちまちに夕闇の中 風が出でぬ さいたま市 小平 英治

庭先に咲く石露の花めでて老い一人静かに立ち去りゆきぬ 山口県 末広 正巳

ぎこちなく席譲りくれし高校生の校章が母校なり 東久留米市 郷間 浩明

老婆四人今生最後の冒険と高尾山からリフトで下る 宇都宮市 大門とよ子

ときをりに日記を書いてをるけれどわれじき後は誰が読むのか 仙台市 鏡 謙一

木枯らしにちぎれて細き蜘蛛の糸少年のころ今は還らず 貝塚市 安部 秀文

## 栗木 京子選

ぼくは好き段だん畑と奈良の町にじ見えている家のげんかん 奈良市 甲斐田 祥

【評】十一歳の祥さん。自分の暮らす町や周りの人への愛がまっすぐに伝わる歌である。「段だん畑」も「じ」も遠く高いところに見えるもの。その伸びやかさが心に残る。

誕生日にメール、電話を受けている夫までもが午睡に来てる 神戸市 高倉 美子

【評】作者の誕生日に家族や友人から連絡が届く。「夫までもが」とある。「夫」は「主人」であろうか。午睡の夢に現れて祝ってくれたのだ。さりげない語調に心情がにじむ。

原因は加齢と言われた帰り道に終わる鳥の赤見ゆ 龍ヶ崎 寺山 昭彦

【評】診察を受けた帰り道。加齢が原因と言われて気が滅入るばかり。散る前の鳥の葉の赤さが作者を励ましているように見える。

枇杷のはな八年越しの満開に驚く人の思ひな白し 小樽市 石田ちづる

かもかくも六場所相撲を観戦し老は一年生きたと解る 静岡市 柴田 和彦

無人駅の郵便ポストは投函を待ち卓臥れてつらら垂らせり 岩手県 千葉 蘇一

喘ぎつつ走り行く子にゴールまで拍手送りて手のひら痛む 白岡市 山下 恵子

ミサイルやドローン飛び交う空の下生きる民有りニュース届かず 守山市 岡本 光夫

光りつついちよう舞い散り積るしずかな奈良の唇を歩めり 寝屋川市 多田 郁子

逝きし子の友と語り今を生きる 姿みえねど思いに充たされ 千歳県 増子 友子

## 依 万智選

あしたまた一歩進もうあの赤い夕日はきつとサイコロの一 東京都 武藤 義哉

【評】人生をすすごうにたとえて、前向きな一首だ。そうか、あの赤く丸い太陽はサイコロの二なのか。欲張らず一番小さな数字を見つけたところもいい。

寒い夜の砂はざらざら邪魔をして眠りのうみへたどりつけない 仙台市 石川 初子

【評】眠れないざらつきは砂、心地よい眠りは海。なかなか寝つけない夜の感じが、砂浜と、その向こうに広がる海との比喩で、実感を持って伝わってくる。

やすやすと入手したのに処分することはいちいち煩雑である 堺市 一條 智美

【評】リサイクルや分類など、最近は何もを捨てるのも一苦労だ。何事も始めるより終わらせることのほうが難しいのかもしれない。

熱したる柿を囓れる幼子の小さな口の蕾が光る 青梅市 諸井 末男

初雪の世界ではしゃべり子供たち全ての白を友達にして 戸田市 水沢わかび

化粧品あれこれ悩む妻よそに書籍売場であるぶ沖繩 宇都宮市 津布久 勇

逢えぬ日に「X」が連なるカレンダーふたりで張った有刺鉄線 ふじみ野市 雨雨雨汰

不参加の理由を訊かれ飲み会が既に終わっていったことを知る 川口市 佐藤よう子

遠くなる意識のはるか対岸で手を振っている目覚まし時計 東村山市 栗守たまご

選り分けて明るい記事の紙面にて大根包みお裾分けする 鎌倉市 河野 節子

## 黒瀬 珂瀾選

連載の初期の画風のあどけなく共に重ねた月日を思う 八王子市 吉村おもち

【評】マンガも長期連載だと初回と最新回で絵のタッチが随分と変わる。漫画家の上達する月日を共に過ごしたという奇妙な連帯感。平日も休日もなく人は死に平日になればその死を聞けり 大和郡山市 大津 穂波

【評】生死に時の差はない。しかし業務に時の差はある。週明けに出動して、業務関係者の週末の死を聞かされる。人間の関係性のギャップをさりげなく表現した一首です。

夕焼けを京都に残しのぞみ発つ「ぶつちよしば漬味」舐めながら 久喜市 木元 貴子

【評】ぶつちよって味覚糖のソフトキャンデーですよね。京都らしい土産を舐めつつ、旅の終わりを惜しむ感覚がよく出ています。しかし、しば漬味ですか……食べてみたい。

北上の川に遡上の鮭をみる冬のおいの風受けながら 仙台市 江川 森歩

山見えぬことは寂しと子は言へり平らげき地に学びし頃に 伊那市 三沢 純子

ぐらつく前歯避けて食みたる干し柿の種は三つと見せに来る孫 甘日市 小島みどり

我慢してちつと見て居り明け方のフロントガラスに溶けてゆく霜 東金市 山本 寒苦

この街に三本立を立見した歌舞伎座という小屋ありしころ 倉敷市 谷吉 修一

英単語を必死に覚える女学生が眩しく見えてまもなく終点 東京都 福島 隆史

紙おむつ嫌がる夫を説得の倦かぬ言葉の舌を嫌悪す 淡路市 河合 律子

◆投稿規定◆ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◆他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌壇(俳) ○○先生(希望選者名) 係または読売新聞オンラインから ◆毎週月曜日に掲載 右の影絵はまんりよう